ツボを押さえて読むほどハマる！

はだし文化新聞

ふむふむ

No.5 2016 7|5

2016年7月5日発行（1月・7月・10月発行） 通巻 第5号
発行／NPO法人日本ビーチ文化振興協会
編集人／朝日健太郎
〒104-0033 東京都中央区新川1-1-7 リバーサイド茅場町3階
電話 03-3552-1171
編集スタッフ／吉田亜衣（BeachvolleyballStyle）
デザイン／島内泰弘デザイン室

INDEX

1面 ・特別対談：飯沼誠司×朝日健太郎 いのちの大切さを海辺で学ぶ
2-3面 ・特集：ビーチスポーツの魅力を発信
・連載：朝日健太郎が目利きする砂ソムリエ
・連載：Beach Athlete Interview
・連載：New Sports Power
4面 ・連載：おらが街のビーチ自慢
・特集：朝日理事長に聞く未来のビーチデザイン
・特集：ODAIBAビーチスポーツフェスティバル2016
・連載：私のビーチ考
・編集後記：はだしの足跡

特別対談 飯沼誠司（一般社団法人アスリートセーブジャパン代表）×朝日健太郎（NPO法人日本ビーチ文化振興協会理事長）

海辺の安全を守るライフセーバーの飯沼誠司さんは日本代表を引退後、朝日理事長とともに大学院でスポーツ科学の研究に取り組んだ同志だ。そんな二人が新たに取り組んでいる海辺で学ぶ「いのち」の大切さ、安全な環境づくりの重要性について語った。

Photo/Satoru Nanase

いのちの大切さを海辺で学ぶ

朝日 我々は大学院でスポーツ科学を学んで、苦楽をともにした同級生なんですよね。

飯沼 海やビーチなど共通のテーマもあったので、それぞれのプレゼンを聞くのが楽しかったですね。朝日さんは砂の研究に熱心でした（笑）。僕も海をフィールドにしてきましたけど、砂に着目したことがなかったので、そういう見方もあるんだ、と興味深かったです。

朝日 お互いの発表にすごく刺激を受けましたね。飯沼さんが取り組んでいた「救命、救助を学校教育に取り入れる」というテーマに共鳴しました。

飯沼 研究当初は、「教育」よりも「競技」に焦点を当てていたんですよ。大学院に入学した頃、代表チームの監督に就任するタイミングで、日本のライフセービング競技が発展させるにはどうしたらいいのか、というテーマに取り組もうと考えていました。けれども、ライフセービングがメジャー競技になったとしても、果たして自分の目的は達成するのか、ということを改めて考えました。「教育」を浸透させることでライフセービングを広めていったほうがいいのではないかと、担当教授の平田竹男先生のアドバイスをいただき、方向性を見出すことができました。

朝日 確かに「競技」という視点から考えると、タイムを0・1秒縮めたいとかライバルに勝ちたいとか、そういう部分が主体となる。けれども、飯沼さんのお話を聞いていると、海辺とか水際とか自然に近いところで競技しているからこそ、もっと安全性を考えていく必要があります。

飯沼 過去20年間を見ていても、水難事故の数は減っていないんです。実は、水泳は幼稚園、小学生で男女ともに習いたい競技1位なんですよ。それなのに、水辺で溺れる事故は減っていない。だからこそ、子供たちの「教育」の一貫として「人命救助」が浸透していけば、事故は減っていくのではないかと考えています。

朝日 自然にふれながら競技をすることは、社会的なことを考えるきっかけになると思います。私自身もインドアバレーボールからビーチバレーボールへとフィールドを移した経緯もあり、自然環境のど真ん中にいると考えさせられる機会は増えますから、お子さんたちがスポーツを通してはだしになる機会を与えたいですね。

飯沼 そうですね、ずっとライフセービングをやってきて、水難事故や人が亡くなるシーンをこの目で見てきました。その経験を通じて感じたことは、海より上のフィールドで人が倒れたときに「ライフセーバーがいたら助かる」「いなかったら助からない」という現実ではなく、ライフセーバーじゃない方でも人の命を救えるような環境を作っていきたい。例えばの話、救急車の到着が遅れた場合、人が亡くなってしまう可能性もあるかもしれない。でも、救急車が到着するまでにAEDを使える人がいれば、助かる確率も高まります。

（2面に続く）

「安全」への対策は、海辺のブランディングに有効
朝日健太郎 Kentaro Asahi

誰もがリスクマネジメントできる環境を目指したい
飯沼誠司 Seiji Iinuma

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION 海と日本 PROJECT

このイベントは、海と日本プロジェクトの一環で実施しています。

イラスト／大口浩平

朝日理事長に聞く 未来のビーチデザイン

ビーチデザイン

私たちが描く未来のビーチ空間は、これまでの波打ち際機能だけではなく、自然に開まれた都市空間として活用していきます。スポーツやイベント観戦用スタンド、ステージ、ウェディングやレストランなどの商業施設、日よけやベンチ、図書館が設置された公園機能を設けて、ビーチの資源を最大活用し、空間の価値を高めていきます。

3色の砂

未来のビーチは、ビーチ空間の用途に合った性質の砂で構成します。波打ち際では、水分を含むと固く締まり、護岸の観点でも適した砂を活用します。スポーツイベント地の砂には、誰もが心地よく感じ、色、感触とも最上級の砂、歩行や砂遊びなど、アクティブな砂活用が期待できます。アスファルトからビーチに一歩踏み出すことのできる導線には、その地域、空間の身近に存在する砂。最も一般的であり、全国的に多く存在している砂を使います。それぞれフィールドの目的に適した砂を区分することで、ビーチを使いやすく、その魅力がさらに増す空間を目指します。

複合空間を生み出す

ビーチは、一足伸ばした先にあるものではなく、気軽にアクセスできる場所、陸地か砂かの2種類の選択ではなく、複合空間として滞在できて過ごしやすい空間を作っていきます。直接砂に触れることがなくても、駐車場の完備やバリアフリーも設置されて、すぐそばでビーチを感じることができる環境が、私の描いている未来のビーチデザインです。

ODAIBAビーチスポーツフェスティバル2016 ビーチゲームズ日本招致推進プロジェクト

新たな客層に知ってもらう機会

ODAIBAビーチスポーツフェスティバル2016（祝・木）、東京都港区おだいばビーチで開催された。

ビーチゲームズ日本招致推進プロジェクトの一つとして開催されているこのイベントは、「みんなで行こうよ！ビーチパーク」をテーマに、誰でも無料で様々なビーチスポーツを体験できる。今年は新たにビーチドッジボールが加わり、お台場のビーチは賑わいを見せた。3回目となった今回は、お台場海浜公園の入り口付近にビッグアーチと特設ステージを設けて、一般の観光客の目に触れるように導線を仕掛けた。

参加者アンケートを収集した結果、57％が「初めて体験した」「初めて観戦した」と回答。また、体験会においては、家族連れでの参加も非常に多く、ビーチスポーツの魅力を知ってもらう機会となった。

A 体験会の講師が顔をそろえた開会式　B ビーチバレーボールは、ナビゲーターの浅尾美和さんが講師を務めた　C ビーチテニスはプロの山本直晃さんが講師を務めた

海辺での安全意識

私がまだ大学生だった昭和40年代、すでに全国の多くの砂浜で浸食による海岸線の後退が問題になっていた。当時、全国トータルで毎年100ヘクタール前後の砂浜が失われている、という研究報告もあったように記憶している。最も大きな原因は、供給される土砂の絶対量が減少したことであるが、港湾や海岸構造物の建設に伴って沿岸部における海水の流れが変化することも要因の一つと言われていた。

今思えば、私が大学の卒論および大学院の研究テーマに「漂砂（沿岸部における砂の移動）」を選んだのも、このような伏線があったからかもしれない。そんな大学時代のある日、私が湘南海岸を対象にした沿岸部の波と流れを調べる現地調査に参加した。この調査は、砕波帯（岸に近づいてくる波が砕ける場所）の少し沖側にバラまいたフロートの動きを、気球に吊るしたカメラで撮影しその動きを追跡するというものだった。フロートをバラまく係だった私は、フロートを抱えて砕波帯近くに行ったところまではよかったが、離岸流に飲み込まれた。必死に泳いで岸に戻ろうとすればするほど反対に沖へ流されていく。チームリーダーのS氏が救助に駆けつけてくれたが、私は必死にS氏にしがみ付こうとした。その時、S氏が「このままだと二人とも溺れるぞ。しっかり沖に顔を向けて波に合せて呼吸しろ」と一喝。私はその一言で我に返り無事に生還できたが、この記憶は40年経った今でも機会あることに鮮明に蘇ってくる。

当協会の遊佐雅美理事（現副理事長）から著書「Life愛する人を助けたい」（2013年）の推薦者になってほしいとの依頼があった時、即座にお引き受けした。それは、私の貴重な体験を通して、海や水辺での遊びやスポーツには常に危険が隣合わせであることを子供たちや親御さんら、多くの人に認識してもらいたかったからだ。安全意識を向上させる取り組みが必要であることを痛切に感じている。

はだしコラム

私の日本ビーチ考 第2回

鬼頭平三 Heizo Kito
NPO法人
日本ビーチ文化振興協会 顧問
一般財団法人
みなと総合研究財団 理事長

編集後記 はだしの足跡 朝日健太郎

今回の対談では、ライフセーバーの飯沼誠司さんにご登場いただきました。通常はビーチから海を眺めていますが、クルーザーに乗船し東京湾の海からビーチを一望しました。普段とは逆の視点から見る港、レインボーブリッジ、おだいばビーチの造形は、それは美しく彩れ、我々の生活にかかせないシンボルを見せつけられました。今回掲載した「我々が目指す未来のビーチデザイン」においても、ビーチの資源を最大活用し、人々の用途に合った空間を築き上げ、その価値を高めていけるように尽力して参ります。これからは、観光資源としても大いに期待できるビーチで、日本中を覆い尽す未来を期待しています。

INFORMATION

あなたの街のビーチや港を紹介しませんか？

「はだし文化新聞」では、皆様の街のビーチや港の情報を随時募集しています。ぜひご意見をお寄せください。

〒104-0033
東京都中央区新川1-17-3階
NPO法人日本ビーチ文化振興協会
「はだし文化新聞」お便り係
メール：info@beach.jp
ファックス：03-3552-1220

夢から感動へ―ハートテクノロジー
東洋建設

海辺で学ぶ現場を「教育」に導入したい

朝日　事故に遭われた方々は被害者としての意識はあると思いますが、日常生活の中で当事者意識を持っている方々は非常に少ない状況です。そんな中、事故を未然に防いでいくことがすごく大切で、飯沼さんが中心になって開催している「いのちの教室」の活動もお手伝いしていきたいと考えています。

飯沼　昨年、私が設立した一般社団法人アスリートセーブジャパンが行っている「いのちの教室」ではアスリートが講師となり、AED（自動体外式除細動器）の使い方、心臓マッサージの方法を子どもたちに教えています。日本は一般市民による除細動が行えるようになって12年目、人口に対して世界で一番AEDが設置されている国です。それなのに使える人が少なすぎるというのが逆に問題視されています。AEDがどこにあって、誰が使えるのかをもっと目に見えてわかるように可視化されることが必要だと思います。

朝日　アスリートが子どもたちに指導するのも、ポイントですね。受け手の子どもたちからしたら、「オリンピックに出たすごい人」「体がすごく大きい人」という背景がうっすら見える中で教えてもらうので、より響きやすい。逆にアスリート側からしてみれば、スポーツの価値を広めていくとともに命の大切さについて、伝道師的な役割を果たしているわけですね。

飯沼　僕自身も小さい頃、初めて水泳選手とふれあったときのことを今でもよく覚えています。だからこそ、アスリート自身のパワー、エネルギー、発信力を発揮していただきたいなと。とくにスポーツの現場における監督、コーチ、プレーヤーがリスクマネジメントを行えるような環境づくりを作っていきたいと思っています。

朝日　アスリート自身も、スポーツの現場で事故に遭遇したときにどのような対応ができるか。公式戦や日々の練習中、1分1秒を争う大きな事故が起きたときの対処法を知っておくだけでも大きく違いますから。

飯沼　もちろん何も起こらないことを願いますが、何か起きたときにどう動けるかを想定しておかないと、ライフセーバーでも毎回シチュエーションは違いますし、指導を受けている人間でもパニックになることもありますから、知識のない人間は頭が真っ白になって119番もできない状態になる。それで身近な人が亡くなってしまい、「あのときやっていればよかった」と思うのは遅い。AEDの実習を授業に導入している学校も、過去に事故があったからという学校がほとんどなので、事後対策じゃなくて、未然に対応することが大切だと思います。

朝日　その分母が大きくなればなるほど、事故時の被害は減っていきますね。子どもたち世代に家族でビーチやレジャーを体験してもらいたいですよね。自然の雄大さ、スポーツにはダイナミックさがあればそ、そこには安全が確保されていないと、家族は安心して楽しむことができない。海辺の楽しいソフトと安全が共存していくことで、ビーチ文化も定着していくはずですから。

飯沼　2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けてスポーツが活性化していく中で、より安全を重視して意識していかないといけない。学校では先生、クラブチームでは監督やコーチ、例えばテニスのボールボーイがAEDを背負っているとか、そういう環境が当たり前になって自然に作れればいいと思っています。

朝日　海辺に人が集まって営んでいく場として推奨していくためには、海辺を学びの場として提供していくことも大切ですね。ただ、楽しむだけではなくて、我々の世代が日本を変えていくために、発信力をもってやっていきたい。飯沼さんのライフワークを全国の皆さんに知ってもらいたいですね。

飯沼　日本ビーチ文化振興協会の活動が普及していかないと僕たちが目標にしている「安全」も広がっていかないと感じています。国内には1200カ所弱の海水浴場があるんですけど、ライフセーバーがいる海水浴場はそのうちの約20％に満たない。自分の経験からも一人のライフセーバーがパトロールする距離は150mから200mが限界ですが、現状は一人3㎞以上、監視しなければいけない状況です。安全を守っていくならば、海水浴場を狭めるのか、人を増やすのか、どちらかの作業になります。それにしても、海辺を狭めてしまうのは本来の楽しみ方ではないですから、海辺の安全とリスクマネジメント、両方を理解して海やビーチの環境を築いていかないと、活性化につながっていかないと懸念しています。

朝日　安全への対策は、海辺のブランディングにも有効ではないでしょうか。現在は、トイレやシャワー、駐車場、海の家などの施設情報を記載したマップは見かけますが、AEDの設置、ライフガードの常駐などが一目でわかるような「安全マップ」ができたらいいですね。「砂ソムリエ」も全国に浸透してきましたので、一目でわかるような海辺の安全マップを作ってください。

飯沼　そうですね、ハートのスタンプで安全度合いが一目でわかるようなものがあれば、いいですね。ライフセーバーにも限界はありますから、海水浴場を利用する方々がいかに未然に事故を防げるかに尽きると思います。海辺でお酒を飲み過ぎたり、危険水域で泳ぐことが多発すると、いくら安全の質を上げようとも関係なく事故は起きてしまう。海辺を利用する人、守る人たちの意識がマッチしない限り、永遠に救命率は上がっていかない。だからこそ、「教育」への導入を目指したいと思います。

飯沼氏が設立した一般社団法人アスリートセーブジャパンが行っている「いのちの教室」では、AED（自動体外式除細動器）の使い方、心臓マッサージの方法を専用のキットを使って子どもたちに教えている

砂ソムリエ ～朝日健太郎が目利きする～ 第5回

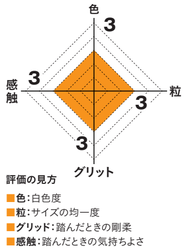
元プロビーチバレーボールプレーヤー・朝日健太郎が各地の砂を踏んで触ってビーチスポーツにふさわしい砂を選ぶ「砂ソムリエ」は、足跡の数で評価する。足跡3つが最高だ。さて連載第5回で取り上げるのは、東京都港区のお台場海浜公園のビーチ造成にも利用されている東京都神津島村・前浜海岸の砂。

東京都神津島村

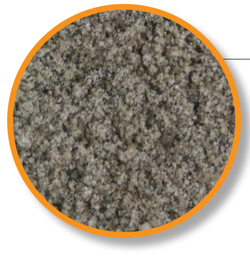
前浜海岸

少しグレーがかった落ち着いた色合いが美しく、上品な表情をしている。粒の大きさが整っており、踏み心地よく安定している。この砂は、景観としての艶、踏んだ時の感触、スポーツ利用時においても良好で、どのシーンにおいてもマルチに活用できる偏差値中央値であり、かつ優等生砂でもある。

活用度が高いことから、東京都港区・お台場海浜公園のビーチ造成にも利用されている。評価は、はだし一つ半。優等生がゆえに、それぞれのポイントが平均的で、鋭い特徴に欠ける。しかし、言い方を変えれば、永く親しめる砂であることは間違いない。



評価の見方
- 色：白色度
- 粒：サイズの均一度
- グリッド：踏んだときの剛柔
- 感触：踏んだときの気持ちよさ



総合評価 〈はだし〉1つ半!!

Beach Athlete Interview ❸
〈ビーチアスリートを追え〉

文／小崎仁久

田畑輝樹（ビーチサッカー）

砂の上では思い通りにならない。それがビーチサッカーの魅力。

PROFILE
1979年4月16日（37歳）、鹿児島県出身。鹿児島実業高卒業後、アルビレックス新潟に入団した。その後、かりゆしFC、FC琉球、静岡FCでプレー後、2005年 引退。引退から2年後の2007年4月、ビーチサッカーを始め、ビーチサッカー日本代表に選出された。

ビーチサッカーはもう9年目のシーズンです。以前はJリーグのアルビレックス新潟などでプレーしていて26歳の時に引退しました。その後、友人に誘われて、ビーチサッカーを遊びでちょっと始めたのですが、すぐにハマりましたね（笑）。

ビーチは通常のサッカーと比べて得点が多く、展開も速い。オーバーヘッドのようなアクロバティックなプレーがよく見られるのも特徴です。でも僕が魅力を感じているのは、シュートもパスも砂の上なので自分の思い通りにはならないところです。砂の質によってもプレーは変化しますし。僕はビーチが本当に好きなのですが、試合に勝ってもいつも満足できないですね、その物足らなさへの欲求で続けているようなものです（笑）。

今シーズンは、クラブでの地域リーグ優勝と全国大会のタイトル奪還が目標です。クラブで結果を残さないと日本代表にも呼ばれませんから。プレーヤーとしては、もっとチームや試合をコントロールすることを極めていきたいです。

これまでにヴァスコーダ・ガマ（ブラジル）やACミラン（イタリア）でもプレーして、ブラジルでは7万人の観客に囲まれてビーチサッカーをしました。いろいろな経験をしてきましたが、ビーチサッカー・ワールドカップは6回出場して、まだベスト8が最高成績です。日本のレベルは上がっていますし、次の大会（17年バハマ）ではもっと結果にこだわってやりたいです。それでビーチサッカーが広がっていくとうれしいですね。

上：普及のため、スクールにも積極的に参加
下：通常のサッカーと比べて展開が速いビーチサッカー

New Sports Power ❹
〈ビーチで生まれた新競技〉

文／小崎仁久

ビーチドッジボール Beach Dodgeball

誰もが笑顔で遊べるニュースポーツ

上：ドッジボールの入門的スポーツを目指す
下：子どもでも遊び感覚でできるのが魅力

誰もが子どもの頃に一度は遊んだことのあるドッジボール。ただし近年では競技性も高まり、競技人口は日本ドッジボール協会（JDBA）に登録している選手だけでも、小学生を中心に2万人を超える。そのドッジボールを砂の上でやろうというのがこのビーチドッジボールだ。

ただしビーチドッジボールは、レクリエーションとしては以前から行われていたものの、競技としてはまだ産声を上げたばかり。ルールもテスト段階で、現在は1チーム5～8人、片面8m×8mのコートで行う規定。ボールに当たると外野へ出る代わりに、相手チームに1点が与えられるポイント制、前後半3分の試合時間で総得点の多い方が勝ちである。ビーチドッジボールの普及を進めているJDBAの京極努理事長は「ビーチドッジボールは、ドッジボールの入門的スポーツとしてルールを簡素化しています」と話す。

これからのスポーツだが、すぐに始められ、ダイビングキャッチなど派手なプレーが続出する魅力はその昔、校庭でドッジをした人たちを惹きつけるだろう。また競技性が強くなったドッジボールから分かれ、輝く太陽の下で「もう一度『遊び』の要素を掘り起したい」という狙いもある。

とにかく嫌しいことは考えず、笑顔でやってほしいと京極理事長。その魅力について「砂の上でやるので投げにくい、取りにくい、避けにくいんです。ビーチドッジボールは『にくい』スポーツなんですよ！」とほほ笑んだ。

おらが街のビーチ自慢 ～ここはいいトコ、一度はおいで～

うちに来て来て！

富山県・富山市、射水市

日本海の海洋文化が根付く街

「日本のベニス」と呼ばれる風情のある運河・内川

射水市の観光名所・海王丸パークと新湊大橋のライトアップ

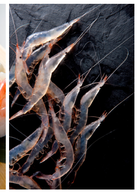
世界で38ある美しい湾の一つに選ばれている水深1000mの富山湾、標高3000m級の壮大な立山、高低差4000mのダイナミックで自然の美しさを感じられる地形は富山の財産です。「天然のいけす」から水揚げされる海の幸も豊富。過去には北前船の寄港地だったこともあり、祭り等の海洋文化が根付いています。射水市の新湊の観光スポットといえば、海王丸パーク。新湊大橋と立山が並んだ景観も絶景で、年間100万人が訪れます。

富岩運河環水公園からの遊覧船、運河沿いを走る「富山ライトレール」に乗れば、廻船問屋の旧家の街並みをご覧いただきながら、海商の街・岩瀬浜にアクセスできます。岩瀬浜は、富山県最大の海水浴場であり、ビーチスポーツも盛んに行われています。2016年7月30日には、富山県で初めてビーチアクティビティを盛り込んだ「富山湾ふれあいビーチフェスティバル」が開催される予定です。

春頃の富岩運河環水公園

地域DATA
- **人口**●富山市：約42万人、射水市：約9.2万人
- **代表ビーチ**●岩瀬浜海岸（富山市）、海老江浜海岸（射水市）
- **観光名所**●松海王丸パーク（射水市）、環水公園（富山市）
- **名産**●シロエビ、ホタルイカ、ブリ
- **宿泊施設**●富山駅周辺にホテル多数

射水市：新湊第一ホテル等

おらが街の味自慢 シロエビ・ホタルイカ・ブリ

富山湾の味自慢は「シロエビ」、「ホタルイカ」、「ブリ」。シロエビは多彩な食べ方があり、ぷりぷりとした食感や品のある味が大人気です。ホタルイカは幻想的に青白く光る姿が、「富山湾の神秘」と呼ばれています。新鮮だからこそ味わえる刺身は地元なではの味。ブリは「富山湾の王者」。刺身、しゃぶしゃぶ、煮物などいくつの味わいを堪能できます。